

社会主義経済と最適経済機能システム論

——経済学方法論にかかわって——

小野 一郎

はじめに

ソ連では一九五〇年代末頃から経済機能メカニズムの最適化問題が明示的に提起されるようになり、最適化のころみは理論的にも実践的にも急速な展開をみせている。政策レベルでは一九六一年の第二回党大会が決定的な劃期となった。大会で採択された綱領は、「社会の利益のために最大の結果を最小の支出で達成すること、これが経済建設の不易の法則である。」⁽¹⁾と規定したが、この命題は経済計画化・管理への最適化視角の導入を公的に端的に表明したものにほかならなかった。

だが、このような問題提起のもつ意味は単なる政策領域をはるかにこえるものがある。それはソ連社会主義経済が質的に新しい発展段階に入ったことの重要な指標にほかならないし、経済機能メカニズムの最適化は社会主義経済に本来客観的に固有な特質をなすと考えられるからである。事実、ソ連における最適化のころみは単に資源配分の技術的組織方法に関して最適計画の編成をめざすというにとどまらない。経済計画化・管理の全過程における情報伝達や意志決定の様式と機構の最適化をふくめ、経済機能メカニズム全体の最適化が追求されるよ

うになっている。

そのさい、経済機能メカニズム全体の厳密な意味における最適化の追求は、数学的方法やサイバネティクスなしいしはシステム論の概念と方法などの広汎な導入に導いた。このような最適化視角およびそれにとりもなり量的・形式的分析手法の導入は、経済機能メカニズムの最適化が社会主義経済に固有なものと考えられるだけに、マルクス主義的の社会主義経済学の方法論に関するきわめて重要な問題提起を意味するといわねばならない。

本稿では、ソ連社会主義経済の現発展段階における経済機能の最適化の問題状況の吟味から出発して、その意味内容や最適経済機能システム論的分析の基本的方向を探るとともに、経済学方法論上の問題として、生産手段所有と経済機能メカニズムの位置づけ、および経済分析における歴史的接近視角とシステム論的・構成的接近視角、質的・内容的分析手法と量的・形式的分析手法の相互関係の検討を試論的にこころみる。

(1) Программа Коммунистической партии Советского Союза, Изд-во «Правда», 1961 г., стр. 86.

一 ソ連社会主義経済の現発展段階と経済機能の最適化問題

一九五〇年代後半を境として、ソ連社会主義経済はそれ以前とは質的に区別される新しい発展段階に入ったと考えられる。一九七一年に開かれた第二四回党大会への報告で、ブレジネフは、「今日の経済を一九三〇年代末の経済と区別している重要な新しい要素をみないわけにはいかない」ことを指摘して、「発達した社会主義社会が建設された」という現段階の特徴づけを与えている。⁽²⁾ このかぎりでは、発達した社会主義社会が完全に建設されたというのか、そのような社会が基本的には建設されたというのか必ずしも明確ではない。この問題に立入る

ことはできないが、現在のソ連は社会主義社会の本格的発展期にさしかかっていると規定するのが適切であるように思われる。いずれにせよ、ソ連社会主義経済が生産力的にも生産関係的にも三〇年代末とは質的に区別される段階に入ったことはたしかであり、現段階が社会主義経済の本格的発展の具体的展望を与えうるような段階であることもたしかなことのように思われる。ここではこのことを確認すればたりる。だが、五〇年代後半を境とするこのような歴史的条件の変化は、従来のソ連型経済計画化・管理メカニズムと現実の経済発展が要求するものとの間はかなり全面的なギャップ、ないしは矛盾を強く感じさせずにはおかなかった。

周知のように、従来のソ連の経済計画化・管理メカニズムは三〇年代の社会主義的工業化の時期に原型が定着したもので、社会主義経済の機能メカニズムとしては二重に規定された特殊性をおびていた。すなわち、一つには、社会主義の歴史的発展段階の点からいえば、基本的に社会主義社会の創出・形成期の産物であるという特殊性がそれである。二つには、ソ連における社会主義社会の創出・形成過程が、一国社会主義建設およびいわゆる経済発展の後進性という特殊な条件のもとで進められたことからくる特殊性がそれである。当時のソ連の条件のもとでは、社会主義社会の創出・形成過程にあつて、できるだけ短期間に社会主義的工業化をやりとげることによって本国を先進的工業国に転化させて、経済の自立的発展と国防力の飛躍的充実をはかることが焦眉の急であつた。したがつて、経済計画化・管理の基本的目的ないしは課題は、全体としていちじるしく重工業優先主義的な再生産構造の追求にむけられることになつた。このような重工業優先主義的な政策目的の設定は、当時のソ連の生産力的および生産関係の条件とあいまって、(一)社会的労働配分ないしは資源配分の技術的組織方法、および(二)经济管理過程の組織様式・機構、すなわち情報伝達と意志決定の様式と機構という、経済機能メカニズムの

二つの側面にそれ相応の特殊性を付与せずにはいなかったのである。

資源配分方法に関しては、重工業優先主義路線は生産力発展の低位という条件のもとで必然的に優先順位の高い部門の強い選好傾向をともなったし、さらに農村における大量の労働力予備の存在という当時の条件がかさなつて生産の粗放的・外延的拡大傾向を生じさせた。したがつて、支出と結果の厳密な対比、すなわち経済効率なしいしは資源の最適配分の問題や生産の質的向上の問題よりは、むしろ単なる物量的な生産結果の最大化の追求が前面に出るといふ傾向がほとんど不可避であつた。

经济管理過程の組織様式と機構に関しては、優先部門選好方式と生産の物量的拡大への強い志向は中央計画・管理機関によるきわめて強力な指導と規制、したがつてまた管理・技術専門家の中央機関への集中化傾向に導いた。直接生産者の教育・文化水準および管理・技術上の知識や能力がなお全体として未成熟であり、他方で専門家が不足しているという当時の条件は、こうした傾向に拍車をかけることになつた。経済計画化・管理組織はいちじるしく中央集権的で指令主義的なものとなつたし、社会ないしは国民経済全体と部分の利益の統一とか、中央機関による経済決定と企業の自主的決定や労働者の創意性との最適な結合といった問題は、事実上むしろ後景にしりぞけられたのである。資源配分方法および管理過程の組織について以上のような特徴をもつ従来のソ連型計画化・管理メカニズムは、社会主義経済の機能メカニズムとしては、とくに機能の最適化に関して明らかに未成熟であり、またむしろ特異な要素を多くふくむものであつて典型的なものではない。

現在では、ソ連社会主義は創出・形成期をぬけ出て新しい本格的な発展をとげるべき歴史的段階にさしかかっているし、一国社会主義建設および出発点での後進性という特殊な条件は消滅している。したがつて、社会主義

的工業化を急速に推進するための重工業優先主義的な経済発展目的の設定の必要性はもはや存在しない。他方、科学技術革命の広汎な展開という現在の条件のもとでの先進的工業国としての発展は、国民経済のすべての部門のいわば全面的な工業化の必要性と可能性を規定しており、先進的な産業構造と最適なつりあいをもった社会的生産全体の総合的發展を志向するようになっていゝ。したがって、そのような再生産構造を基礎として、個人の精神的・肉体的能力の全面的な発達と發揮、およびこの方向での社会構成員全員福祉の向上という社会主義社会の基本的な内在的目的を、経済計画化の直接の中心的課題として追求しうる可能性もまた現実に生じてきていゝるといゝえよう。一九七一年の第二四回党大会で決定をみた第九次五カ年計画（一九七一一七五年）が、五カ年計画としてははじめて生産手段生産の成長率を上廻るような消費財生産の成長率の設定をおこなったことは、このよゝうな経済発展の目的設定における新しいあり方の端的な表明にほかならぬ。こうした条件のもとでは、従来の経済計画化・管理メカニズムはとくに経済機能の最適化の点からすれば、完全に過去のものとなつたといゝわねばならぬ。

社会的労働配分ないしは資源配分の技術的組織方法の側面に関しては、科学技術革命を推進軸とする生産力の発展は、生産の社会化をいゝつそうおし進め経済規模の巨大化と経済連関の複雑化をもたつただけでなく、経済連関の再編を不断に要求するよゝうな経済発展のダイナミズム、急速な技術変革にともなう経済発展における不確定性、選択可能な経済発展代替案の多様性などの増大に導いていゝ。また農村の労働力予備は基本的に消滅していゝる。このよゝうな条件のもとでの先進的で最適な構造をもつた経済の総合的發展の追求は、優先部門選好方式や外延的生產發展傾向に代つて、経済効率の増大、生産の質的改善、新技術導入などによる生産の集約的・内包的

発展、および資源配分の最適計画の選択への志向を強めている。

他方、経済管理過程の組織様式・機構の側面についても、上述のような経済発展目的の設定の新しいあり方や資源配分方法における転換は、直接生産者の教育・文化水準と管理・技術上の知識や能力の向上、および大量の管理・技術専門家の存在という現在の条件とあいまって、いちじるしく中央集権的で指令主義的なメカニズムを保持すべき根拠を消滅させるにいたっている。それに代って、社会的規模における生産手段の共同所有者⇨共同生産者としての社会構成員全員の創造性や、生産者集団としての企業の自主性のいっそうの発展と発揮を促進するような、経済計画化・管理メカニズムが必要になっているのである。現段階にあつては、民主主義的中央集権原則にもとづいて、経済決定の集権と分権の最適な結合が保障されるような経済機能メカニズムを確立することが必要である。直接生産者の大衆的管理参加⇨自主的管理の広範な展開をとまなうこのようなメカニズムの確立は、社会主義社会の本格的発展の不可欠の側面と考えられる社会主義的民主主義や社会的自治の発展にとって、経済的土台における実体的基礎をなすものである。

およそ以上のような意味において、従来の経済機能メカニズムを新しいものにとりかえることが、ソ連社会主義経済が生産力的にも生産関係的にも社会主義としての本格的発展をとげるうえで、一つの決定的な要件になっているといえよう。一九六一年の第二回党大会における経済機能の最適化問題の提起や、その具体化としての一九六五年九月の党中央委員会総会での経済改革の決定は、このようなソ連社会主義経済の現発展段階の客観的要求の文脈のなかに位置づけねばならない。経済改革は現在までのところ、企業の自主性の拡大と経済的刺戟装置の強化を基軸として経済効率の増大をはかる点に重点がおかれており、主として企業の計画化・管理制度の改

革、すなわち国家と企業の相互関係の次元での改革を中心に進められてきた。しかし、同時に経済改革の当初から、国民経済の計画化方法を科学的に基礎づけられたものに改善してゆくころみが多くなっていった。また改革が進行するなかで、直接的生産過程の労働編成様式の合理化のころみが科学的労働組織という形で進められてきたほか、一九七三年に入ってからには、前年度の農業不作を中心とする生産不振も手伝って社会主義競争の意義が改めてクローズアップされるようになるなど、経済計画化・管理メカニズムの種々の側面で新しいころみが打出されてきている。

こうした多面的な動きは、現在の客観的条件の要求する改革が、単に経済効率の増大とか資源配分の最適化といった社会的生産の技術的組織方法の改善にとどまらず、また国家と企業の相互関係の次元での改革にとどまらず、これらを構成部分としてふくむような経済機能メカニズム全体の最適化を意味するより広く深い改革であることを、物語っているように思われる。第二回党大会でブレジネフは、経済改革が「一度きりの対策ではなく、実生活が提起する諸問題を解決するダイナミックな過程である」ことを強調した。⁽³⁾ また、たとえばアガンベギヤンらは、「経済改革は表面の近くに横たわっている生産余力の動員をうながした。現在必要なのは、奥深い所にあるすべての生産余力の系統的で目的意識的な利用にむかって経済諸組織を刺激することである。」と述べている。⁽⁴⁾ このように、最近とみに経済改革がかなりの期間にわたる過程であり、さらに発展させられるべきものであることが強調されるのは、問題の広さと深さとに由来するものといつてよいであろう。

したがって、一九五〇年代末頃から、経済改革への胎動がおこるなかで経済の最適計画化のころみはじまったのは決して偶然ではない。⁽⁵⁾ このころみは、当初の時期における主として資源配分の側面にかかわる局所的

問題の最適計画化という枠をこえて、経済機能メカニズム全体の最適化の方向に展開をとげるようになったが、何よりもその理論的基礎としての国民経済の最適計画化モデルの構成という形で進められてきた。それは大別すれば、(一)経済予測モデルや経済成長モデルなどのマクロモデル、(二)静態および動態的部門連関モデルや国民の所得・需要形成モデルなどのバランスモデル、(三)最適部門発展モデルや地域計画化モデルなどの局所的モデル、の三つの基本的局面で進められてきたが、その多くのものについて実験的計算がおこなわれているだけでなく、すでに一定の現実的效果をもたらしているものもある。たとえば、最適部門発展モデルは、若干の産業部門で従来の方法で作成された最良の計画に比して一〇―一五%の節約効果をあげており、こうした計算結果は第九次五カ年計画(一九七―七五年)の作成にあたって部分的に利用されるにいたっている。

他方、経済の最適計画化のころみは、そのための技術的手段の創出、すなわち電子計算機利用にもとづく自動管理システムの創設をうながした。第八次五カ年計画(一九六―七〇年)期間中に主として工業企業レベルで四〇〇のシステムが完成したし、現在の第九次五カ年計画では、すべての連邦工業省と一連の連邦省庁レベルのものをふくみ一六〇〇のシステムの創設が予定されている。⁽⁶⁾

しかしながら、社会主義経済の最適計画化モデルの構成は現在のところ一つの決定的ともいえる弱点から解放されていない。シャターリンの言葉をかりるならば、それはまだ「部分的・孤立的性格」をおびていて、従来の計画化方法の補足物ないしは一種の「上部構造」の域を出るものとはなっていないことがそれである。⁽⁷⁾ 実用化が進んでいる最適部門計画化モデルをとってみても、所与の産業部門の生産物構造は与件として与えられたうえで、それを前提として支出の最小化をはかるといった形に定式化されるのであるから、生産物構造の決定はモデルの

外にとりのこされていて、いまのところ従来の方法によって与えられるよりほかはない。したがって、かりに国民経済全体の最適計画が見出されたとしたばあい、部門の最適計画化モデルの与件とされている生産物構造そのものに大巾な修正を加える必要が生じるかもしれない。また、そのような部門のモデルが、実は国民経済全体の最適計画化にとってマイナス効果をもたらすものであったことが判明するかもしれないのである。

国民経済の最適計画化のこころみの最初の一石を投じたカントロビッチは、当時つぎのように述べた。「全体と部分とのこの調和をはかること、のなかに計画化と、国民経済計算の基本的困難がある。もしも、個々の部門や企業の計画化の諸問題を別々でありながら同時に相互に調和した形で解決してゆくような、そして計画諸決定の最適(あるいはそれに近い)システムに導くような方法が創出されるとしたら、この困難は克服されるであろうに。」⁽⁸⁾
この問題への回答はまだ見出されていないわけである。

ほかならぬこの問題の解に接近してゆくことが、すなわち、フェドレンコによれば、「国民経済計画化の部分的問題の解決から全体的問題の解決への漸次的移行を準備」することが、ソ連における経済の最適計画化の当面の中心的環となっている。⁽⁹⁾ここで問題とされているのは、「経済の分断的・部分的モデル、経済諸範疇の孤立的研究から、経済における連関と関係の全体系をみることを、その発展の最善の道を規定し予定された諸計画の遂行を促進するようなパラメータの全複合体をみることを、可能にするような総体的概念への移行」という課題である。⁽¹⁰⁾この課題は経済改革のより広く深い発展という前述の課題と表裏一体をなしており、それは社会主義経済の最適機能システムの創出の課題として、すなわち、フェドレンコの定義をかりるならば、「国民経済のすべての環の最適計画の編成をも、これらの計画の実現過程そのものの最適化をもふくむ単一の全体システム」の創出の

課題として設定されている。⁽¹¹⁾ 前述のようなソ連社会主義経済の現発展段階の客観的条件にてらしてみるとき、このようなシステムは、少くとも、(一)長期の期間をみとおした総合的な経済発展の目的の設定とプログラムの策定、(二)社会的労働配分ないしは資源配分の最適計画の選択と遂行、(三)国民経済全体と部分の利益の統一および中央集権的決定と企業や生産者の自主性ないしは創意性との最適な結合を、保障するものでなければならない。

- (2) 《Правда》, 31 марта 1971 г.
- (3) Там же.
- (4) А. Г. Аганбегян, К. А. Варгеновский, А. Г. Гранберг. Система моделей народнохозяйственного планирования, Изд-во «Мысль», 1972 г., стр. 44.
- (5) 経済計画化における部門連関システム(産業連関分析)や線型計画法などの数学的方法および数学モデルの利用の必要が、ネムチーノフらによって提唱されるようになったのは一九五〇年代なかば頃のことであるが、国民経済の最適計画化問題を明確な形で提起したのは、一九六〇年に刊行をみたカントロビッチの名著「最良の資源利用の経済計算」(Л. В. Канторович. Экономический расчет наилучшего использования ресурсов, Изд-во АН СССР, 1960 г. 吉田靖彦氏による邦訳『社会主義経済と資源配分』がある。)が、その最も最初である。
- (6) С. Шагалин. Экономико-математические методы в планировании и управлении, 《Вопросы экономики》, № 7, 1971 г., стр. 17-18; Н. Федоренко. О разработке системы оптимального функционирования социалистической экономики, 《Вопросы экономики》, № 6, 1972 г., стр. 95; А. Г. Аганбегян и др. Система моделей..., стр. 56-57.
- (7) С. Шагалин. 《Вопросы экономики》, № 7, 1971 г., стр. 19.
- (8) Л. В. Канторович. Экономический расчет..., стр. 19.
- (9) Н. Федоренко. Социально-экономические цели и планирование, 《Коммунист》, № 5, 1972 г., стр. 66.
- (10) Проблемы оптимального функционирования социалистической экономики, под ред. Н. П. Федоренко,

二 社会主義經濟理論とシステム論的・構成的接近方法の必要性

上述のような最適計画化のこころみと經濟改革との綜合化は、最適計画化理論に新しい方法の導入をもたらさずにはいかなかった。それはシステム論的接近方法である。社会主義經濟の機能メカニズムは、相対的自立性をそなえた構成要素およびそれらの間の垂直と水平の連関からなっているが、全体として統一された共通の目的を意識的・計画的に追求する複雑な動的システムとして把握できる⁽¹²⁾。このシステムは、生産手段と労働力という生産力の要素および生産物からなる物質の流れとそれらに関する情報の流れとをふくんでおり、物質的過程とその制御過程とからなる一つのサイバネティクス・システムとみなしうる⁽¹³⁾。社会主義經濟の機能メカニズムの最適化のために、このシステム全体の共通の目的と各構成要素の部分的目的およびそれらの間の連関を正確に設定し、それにてらしてシステムの制御過程の最適化をはかってゆくことが必要である。これらの問題の解明にとってサイバネティクスないしはシステム論の概念と方法は有効性をもつと考えられる。

したがって、經濟理論に数学的方法や数学モデルを結合することによって發展をとげてきた最適計画化理論が、さらにシステム論を導入することによって社会主義經濟の最適機能システム論の構築をめざすようになったのは、自然なことであつたといえよう。一九六七年八月の党中央委員会決定『社会科学のいっそうの發展と共産主義建設におけるその役割の向上に関する措置について』は、經濟学の分野の重要な課題の一つに、「社会主義國民經

済の最適計画化と最適機能の理論および方法の解明」をあげている。¹⁴だが、この課題の追求は、マルクス主義経済学にとってきわめて大きな方法論上の意味をもった、システム論的接近方法の導入という問題提起をともしることになったのである。

マルクス主義経済学は、資本主義体制批判の科学として、またブルジョア経済学批判の科学として発生し発展してきた。したがって、それは生産手段の資本主義的私的所有によって歴史的に規定される資本主義的生産様式の社会経済的性格と、その発生・発展・消滅過程に貫徹する客観的法則性を明らかにするという方法、すなわち歴史的接近方法を方法論の基底にすえている。現実の現象面での資本主義経済の具体的な構造や機能の分析も基本的にこの視角からおこなってきた。社会主義経済についても、それがソ連において創出・形成過程にあったらちは、マルクス主義経済学のこの伝統的視角は現実の歴史的条件が要求する事実上ほとんど唯一の視角でありえたといえる。しかしながら、社会主義経済が創出・形成過程をぬけ出て、それ自身の安定した基礎のうえで再生産されるような新しい発展段階に達し、厳密な意味での経済の最適計画化ないしは最適機能の問題が明示的に提起されるようになると、マルクス主義経済学は、右の伝統的視角のみでは提起された新しい問題にこたええないという事態に、否応なしに直面せざるをえなかった。

こうして、マルクス主義経済学にとって、伝統的な歴史的接近方法に加えて、数学的方法やシステム論の概念と方法の利用にもとづく規範的・目的論的な構成的接近方法の必要が、強く感じられるようになったわけである。この問題を明確な形で指摘したのはフェドレンコであった。彼は一九六六年一月に開かれた科学アカデミーの最適計画化と価格形成に関する討論会での主報告のなかで、つぎのように力説した。「大胆にいうなら、現存の

経済学には多くの点で社会主義経済の研究にたいする記述的接近が特徴的である。ところが、計画的に制御されるシステムとしての社会主義経済は、構成的接近を、つまり社会主義経済の実際の管理のために量的特徴づけを利用することが可能となるほどの水準の明白さと、正確さとに到達しているような経済機能メカニズムの厳密な理論的分析を要求している⁽¹⁵⁾。

マルクス主義経済学における構成的接近の必要という問題提起は、本質的には、この接近方法と伝統的なマルクス主義的歴史的接近方法とをどのように位置づけるかという問題の提起にほかならない。この点に関連して、構成的接近の熱心な主唱者の一人であるシャターリンはつぎのように主張している。「経済学的範疇を、社会主義経済の分析に関してアプリオリに与えられる初発的諸範疇と、意識的に最適化されるシステムとしての社会主義経済の理論的分析の結果であるようなアポストリオリな二次的諸範疇とに、区別すること」が必要であり、社会主義経済「理論は初発的諸前提の一定の体系にもとづいた規範的理論となる」べきである⁽¹⁶⁾。この主張は明らかに、後述するような社会主義的生産関係の体系の次元のことなる二つの断面の区別を意識しており、その点で積極的な意味をもつものといえる。

しかし、他方で社会主義的所有関係ないしは社会主義の支配的生産関係の諸範疇が、社会主義経済の分析にとってアプリオリな初発的範疇の位置におかれ、事実上経済学から閉出されてしまう結果に導きうる点で、重大な問題点をはらんでいるといわねばならない。実際シャターリンにあってはこれらの範疇は「初発的前提」にすぎず、「これらの前提は社会主義経済理論に関してアプリオリなものとみなすことができるのであって、社会主義経済理論の課題は、それらを基礎として社会主義経済の最適機能メカニズムを規定するような経済学的『定理』

を証明することにある」とされ、したがって、「社会主義にとって十全な経済的諸関係とそれらを反映する社会主義経済学の経済学的諸範疇とは、社会主義経済の機能における最適の追求、社会主義的生産関係を構成する初発的諸特徴にもとづく追求にもなつて生ずる」ということになる。⁽¹⁷⁾ このような主張には、社会主義経済の機能メカニズムの歴史的規定性の解明を軽視し、いわばこれを目的論的・規範的理論のなかにのみこむような形で解消してしまふ、非歴史的で技術主義的な傾向が顔をのぞかせているように思われる。

フェドレンコにしても、現存のソ連の「経済理論は、経済的諸範疇への没システムの・非構成的接近というあまりにも記述的な性格をおびるものになっている」として、それとは逆に、「現代の経済学のもっとも重要な特徴はますます構成的性格を獲得することにある、分析方法は最適経済システムの総合・構成・設計の目的に従属する。」⁽¹⁸⁾と主張するとき、歴史的接近と構成的接近との位置づけが充分に明確であるとは思えない。

構成的接近方法の強い反対者であるクロンロードは、このようなシャターリンやフェドレンコの見解を批判して、つぎのように述べている。こうした主張は、「経済発展の最適性の分析を堅固な具体的・歴史的軌道にのせ、経済の現実の状態による最適の物質的・因果的規定性を明らかにする」のではなく、「最適を経済関係の体系によって規定される産物として理解するかわりに、経済関係を最適によって規定される産物として研究」しようとする接近方法への傾斜をはらんでおり、「存在するものの理論ではなく、そうあるべきものの理論、⁽¹⁹⁾当為の理論」であつて、「目的論的な最適化的接近方法を因果論的接近方法に⁽¹⁹⁾対置」するものである。シャターリンやフェドレンコの主張の弱点に關するかぎりではクロンロードの批判には根拠がある。彼は、「経済的最適は経済発展法則の全体系の従属化作用と相互作用との結果的表現である」という基本的視角に立っており、この視角から、

「経済的最適の内容の研究」において「経済法則の全体系の相互作用の解明に立脚すべきこと」を強調するのであって、「抽象的な規範的・目的論的接近方法」にもとづいて、「最適化される経済システムを、経済関係の外で再生産の自然的な諸要素、稀少資源予備（物的および人的）のシステムとして研究する」ことを批判している。⁽²⁰⁾

歴史的接近というマルクス主義経済学の基本的視角をあくまで基礎において、その土台のうえに最適性の問題を位置づけようとする点では、クロンロードの主張は原則的に妥当性をもつといえよう。しかしながら、クロンロードのばあい、社会主義経済の機能の最適化の内容的検討においてはその歴史的規定性の此岸で足踏みをするだけで、規範的・目的論的規定性の彼岸にむかって事実上ほとんど一步も踏み出していないところに大きな問題点がある。彼は経済機能メカニズムが歴史的・因果的法則の支配をうけるとともに、その枠のなかでそれとは区別されるような合理的行動原理によって規制されることを事実上認めていないわけで、シャターリンにはみられる社会主義的生産関係の二つの断面の区別という問題意識が、クロンロードのばあい欠けているように思われる。だがこれでは、シャターリンが反批判のなかでいみじくもクロンロードを評しているように、「最適性範疇は彼の理論構成においては形式的役割を演じているのであって、より正確にいうなら、それは彼にとつて社会主義社会の経済関係の理論的分析のためには全然必要でない」ことになってしまふのが落ちであろう。⁽²¹⁾ 規範的・目的論的規定性や構成的接近方法にたいするこのようなニヒリズムは、社会主義経済の最適機能システムの創出への道を出発点においてとざす結果にしかならない。

社会主義経済ないしはその機能メカニズムの社会経済的性格や歴史的発展傾向は、クロンロードが強調するよ

うに客観的に貫徹する歴史的・因果的法則によって規定されており、これらのものを何かの規範にもとづいて最適化するわけにはいかない。社会主義経済の最適化とはその機能メカニズムの具体的な構造および運動過程の最適化であつて、すでに言及したこのメカニズムの二つの側面、すなわち、（一）社会的労働配分ないしは資源配分の技術的組織方法、（二）经济管理過程における情報伝達と意志決定の組織様式・機構にわたつて、社会的生産物の生産・交換・分配・消費の全過程の運動の決定・組織・規制方法および機構を、社会主義に固有な一定の規範にもとづいて最適化してゆくことにはかならない。最適化の対象とされるのは、社会主義経済の内在的・本質的な社会経済的關係ではなく、その具体的な運動のメカニズムであり、本質的關係を規定する客観的諸法則の作用そのものではなく、その作用メカニズムなのである。

このように、社会主義経済の最適化はこれら客観的諸法則の支配の枠組のなかでおこなわれるのであつて、その作用様式にかかわる具体的形態を規定するという意味でこれら諸法則の貫徹形態をなしている。しかしながら、社会主義経済の最適化が、経済機能メカニズムのあり方の種々の可能な代替案のなかから、一定の規範にてらして最適と考えられるものを選択してゆく行為であるかぎりでは、客観的に貫徹する歴史的・因果的法則の具体的な貫徹形態は、因果關係的な一意的決定以上のものをふくんでいるといわねばならない。

この点に関連して、ベリは、「計画化においては、種々のあるいはたがいに矛盾する企画、二者択一的解決策としばしば取組むことになる。知識にもとづいて多くの解決策から一つを自由に選択することは意志行為である。」と指摘したうえで、「社会主義の経済諸法則の知識のみでなく、それらを国民経済の計画化と計画的運営の過程において創造的に適用できる能力」の必要を力説している²²。計画主体がこのような創造的能力を發揮して経

濟機能メカニズムのあり方の最適な代替案を選択してゆくばあい、選択の許容領域が、所与の国あるいは發展段階における社会主義の生産力と生産關係の發展の具体的条件によって客觀的に規定されていることは、三〇年代のソ連社会主義經濟の發展の客觀的条件と現段階のそれとを比較してみるだけでも、はっきりすることである。

このように、社会主義經濟を規定する歴史的・因果的法則の具体的な貫徹形態の決定の非一意性は、何よりも、個々の国あるいは所与の發展段階の客觀的な具体的条件の違いによって規定される、社会主義の種々の發展徑路の存在の可能性と結びついた經濟機能メカニズムのあり方の違いとしてあらわれる。したがって、規範的・目的論的接近方法にもとづく社会主義經濟の最適化は計画主体の意志行為や創造的能力を前提としており、そこでの決定は因果關係の一意性以上のものをふくんでいるが、やはり歴史的・因果的法則の具体的な現象形態をなすのであって、これらの法則的作用や客觀的諸条件から自由な主觀主義的・恣意的な決定ではありえない。

社会主義經濟の機能メカニズムの解明における構成的接近方法の必要性は以上で一応明らかであろう。歴史的接近方法と構成的接近方法との位置づけという提起された問題についても、社会主義經濟の機能メカニズムの社会經濟的性格の歴史的・因果論的な質的分析と、このメカニズムの技術的組織構造の規範的・目的論的な量的・形式的分析とを、次元のことなるものとして明確に区別したうえで、前者を基礎として両者の統一をはかるような方法論が必要とされていることは明らかなように思われる。このことをいまま少し掘りさげて明らかにするには、社会主義的生産様式ないしは生産關係体系における經濟機能メカニズムと、この体系の本質を規定する社会主義的所有關係との相互關係、すなわち、両者の区別と統一の問題に立入る必要がある。

(12) システムの定義は分析の次元によりことなりうるであろうが、ここではごく一般的なアフアナシエフの定義をとる

のが目的にならなっているように思われる。すなわち、システムとは「構成要素の総体であって、これらの要素の相互作用が、それらには固有な新しい(総合的・システムの)質をうみだすもの」である(B. Г. Афанасьев. 学術管理の一般論, 1968 г., стр. 17.)。

- (13) この点に関連して、ウォルト・ドナルドソンは「一般に経済を「大きな複雑性をおびた特殊な種類のサイバネティクス・システム」とみなすこと(B. A. Волковский. Модель оптимального планирования и взаимосвязи экономических показателей, Изд-во «Наука», 1967 г., стр. 5.)。また「ソ連の社会主義経済で起こった「巨大な複雑性を帯びた意識的調整過程のサイバネティクス・システム」の規定」(Н. Я. Петраков. Вопросы теории оптимального управления экономикой, «Известия АН СССР. Серия экономическая», №2, 1971 г., стр. 82.)。
- (14) «Правда», 22 августа 1967 г.
- (15) Дискуссия об оптимальном планировании, Изд-во «Наука», 1968 г., стр. 27-28.
- (16) С. С. Шатагин. Некоторые проблемы теории оптимального функционирования социалистической экономики, «Экономика и математические методы», № 6, 1970 г., стр. 837, 845.
- (17) Там же.
- (18) Н. П. Федоренко. О разработке системы оптимального функционирования экономики, Изд-во «Наука», 1968 г., стр. 7, 23.
- (19) Я. Кронрод. Экономический оптимум и некоторые вопросы методологии оптимизации народнохозяйственных планов, «Вопросы экономики», № 1, 1968 г., стр. 51-53; Я. Кронрод. Теоретические проблемы оптимального хозяйства, «Плановое хозяйство», №5, 1973 г., стр. 84.
- (20) Я. Кронрод. «Вопросы экономики», №1, 1968 г., стр. 51-52.
- (21) С. С. Шатагин. «Экономика и математические методы», №6, 1970 г., стр. 845.
- (22) Планирование народного хозяйства СССР, под ред. Л. Я. Верри, Изд-во «Экономика», 1968 г., стр. 12-13.

三 生産関係の二つの断面と経済機能分析の二つの接近方法

生産様式ないしは生産関係体系における所有関係と経済機能メカニズムの位置づけおよび性格に関して、マルクスの諸命題を手がかりにして検討を進めることにしたい。マルクスは一連の生産様式とその経済機能メカニズムをなす商品生産との関係についてつぎのように述べている。「商品生産および商品流通は、種々なる範囲と重要さにおいてだといえ、種々様々な生産様式にそなわる現象である。だからひとは、これらの生産諸様式に共通な、抽象的な、商品流通の諸範疇を知っただけでは、これらの生産様式の特徴的區別についてはまだ何も知らぬのであり、したがって、これらの生産諸様式を価値判断することはできない。」⁽²³⁾マルクスはまた特定の生産様式の支配的ないしは規定的生産関係に言及して、「資本制的生産様式……の支配的範疇、それを規定する生産関係、をなす資本」⁽²⁴⁾と記しており、さらに「労働者と生産手段とはつねに生産の要因である。……総じて生産がおこなわれるためには、それらが結合されねばならぬ。この結合がなされる仕方様式の特異性によって、社会構造の種々なる経済的時代が區別される。」と主張している。⁽²⁵⁾

これらの命題においてマルクスは二つのことを明らかにしている。第一は、あれこれの生産様式ないし生産関係体系の「特徴的區別」、すなわちその本質的な社会経済的性格あるいは歴史的発展傾向は、生産者と生産手段の結合の仕方様式、すなわち生産手段所有関係によって規定されるということである。この意味で、生産手段所有関係はあれこれの生産様式ないしは生産関係体系の支配的・規定的生産関係をなしている。第二は、商品生産はあれこれの生産様式の「特徴的區別」を規定するわけではなく、そこにおける生産関係は特定の生産様式の支

配的・規定的生産関係とはことなる次元のものとして、区別されねばならないことである。商品生産はあれこれの生産様式の支配的・規定的生産関係とは明確に区別される、その生産様式の運動形態ないしは機能メカニズムを構成しているのである。

このように、あれこれの生産様式ないしは生産関係体系には、それに固有な社会経済的性格および歴史的發展傾向を規定する支配的・規定的生産関係があり、生産手段所有関係がそのような生産関係体系の断面をなしている。これにたいして、経済機能メカニズムはあれこれの生産様式ないしは生産関係体系の具体的な運動形態を規定しており、そのようなものとしてこの体系のいま一つの断面を構成している。経済機能メカニズムを構成する生産関係は、社会的欲望に対応して社会的労働ないしは資源の配分をどのような方法と機構によって決定し、組織し、規制するかという次元における生産関係である。このような方法や機構は、所与の生産様式の生産力的基礎ないしは物質的・技術的基礎によって技術的に規定される側面をもっており、そこでの生産関係は特定の生産様式のみ限定されない一般的な労働編成様式の組織形態をふくんでいる。このかぎりにおいて、経済機能メカニズムを構成する生産関係は、所与の生産様式ないしは生産関係体系の支配的・規定的生産関係をなす生産手段所有関係から区別されるし、一定の自立性をもつ。経済機能メカニズムが商品生産という形態をとるばあい、それが資本主義のもとにおいてだけでなく他の一連の生産様式のもとでも存在しうるのはこのことに関係がある。生産関係体系のこれら二つの構成部分、いわばたて糸とよこ糸の関係にある次元のことなる二つの断面として明確に区別されねばならない。

この点に関連して、アゲーエフは、「発生の基盤によって、生産関係を型と意味が本質的にことなるいくつかの

グループに分類することができるとして、まず「生産手段所有形態から直接出てくる生産関係」、さらには「生産のもっとも一般的な経済的形態と結びついた生産関係」、その他をあげている。⁽²⁶⁾ またクリコフは、「社会的生産の遂行形態は……基本的生産関係にたいして一定の自立性をもっている。……この事情は、生産関係体系において二つの断面・次元・側面を、すなわち経済諸過程の遂行の経済的メカニズムとこの体系の社会経済的性格とを区別することを可能にする。」と主張している。⁽²⁷⁾ アゲーエフとクリコフとは、生産関係体系をどのようにして、またいくつのグループあるいは側面に区分するかに関してちがいがあがあるが、ここではそうした区別の必要性を確認したうえで、クリコフとともに、生産関係体系の二つの断面の区別と、そのかぎりで経済機能メカニズムがもつ生産手段所有関係からの一定の自立性とに注目しておきたい。

以上で明らかのように、経済機能メカニズムを構成する生産関係は、あれこれの生産様式の本質的な社会経済的性格を規定する支配的・規定的生産関係とは区別されねばならない。しかし、それは後者と無関係に存在するわけではなく、これとの結合において存在する。この点に関連して、マルクスは、経済機能メカニズムの特定の形態としての商品生産、ないしはそれを支配する価値法則の一般的・歴史貫通的基礎と歴史的規定性との関係、さらに特定の生産様式への経済機能メカニズムの包摂の仕方について、『クーゲルマンへの手紙』（一八六八年七月一日付）の周知の一節でつぎのように書いている。「種々の欲望の量におうじるもろもろの生産物の量のためには、社会的総労働の種々の特定の量が、必要だということも、どんな子供でも知っていることである。このように社会的労働を一定の比例で配分する必要は、社会的生産の特定の形態によってなくなるものではけっしてなく、ただそのあらわれかたが変るだけであるということも、自明のことである。およそ自然法則を廃止するなど

ということではできない。歴史の状態がことなるにつれて変化することができるのは、それらの法則が自己貫徹する形態だけである。そして、社会的労働の連関が個人的労働の生産物の私的交換としてあらわれるような社会状態でこの労働の比例的配分が自己貫徹する状態が、まさにこれらの生産物の交換価値なのである。⁽²⁸⁾

ここではつぎの二点が明らかにされている。第一に、社会の欲望に対応して社会的労働を一定の比率で比例的に配分する必要は一般的・歴史貫通的な「自然法則」であって、どのような生産様式のもとにおいても、この法則は経済機能メカニズムを規制する法則ないしは原理の一般的・技術的基礎として貫徹する。いいかえれば、経済機能メカニズムは、その特定の歴史的規定性を捨象した一般的・抽象的次元においては、社会の欲望に対応するような社会的労働ないしは資源の配分の一般的・技術的メカニズムとして把握できる。第二に、このような経済機能メカニズムの一般的・技術的基礎の現実の現象形態は歴史的規定性をまとうのであって、生産物の私的交換という条件、すなわち生産の私的性格ないしは生産手段の私的所有と社会的分業という歴史的条件のもとでは、この条件に包摂されて商品生産・価値法則として登場する。

このように、経済機能メカニズムは生産様式において支配的・規定的生産関係とはことなる断面をなしているし、したがってまたその一般的・技術的基礎は歴史貫通的な「自然法則」によって規制されるが、そのような一般的・技術的メカニズムがいわばはだかで現実に登場するわけではない。経済機能メカニズムは、あれこれの生産様式ないしは生産関係体系の構成部分として、その目的・手段・機構の社会経済的内容が、この体系の支配的・規定的生産関係としての生産手段所有関係によって規定され制約をうけることにより、はじめて所与の生産様式ないしは生産関係体系に包摂されて現実に機能しうるのである。⁽²⁹⁾

生産様式ないしは生産関係体系の二つの断面の区別と統一とは、両者を支配する法則ないしは原理の区別と統一をとともなっている。そこから、両者の解明における接近視角や分析方法の区別と統一が必要であるということになる。あれこれの生産関係体系の支配的・規定的生産関係としての生産手段所有関係は、この体系の社会経済的性格や歴史的發展傾向を規定するのであるから、客観的に貫徹する歴史的・因果的法則の支配をうけており、その解明には歴史的・因果論的視角とそれにもとづく経済学の質的・内容的分析方法を必要とする。経済機能メカニズムは、所与の生産様式の運動のメカニズムとして生産手段所有関係によって一定の社会経済的規定性を与えられるのであるから、そのかぎりにおいて歴史的・因果的法則の支配をうけるし、したがって、歴史的・因果論的視角と経済学の質的・内容的分析方法がここでも不可欠であり主導的役割をはたす。

他方、経済機能メカニズムは支配的・規定的生産関係を支配する歴史的・因果的法則の作用メカニズムである。ここでは、生産手段所有関係によって規定される経済機能メカニズムの目的・手段・機構の社会経済的内容を前提として、その枠組のなかで、どのようにして社会的労働配分の最適な方法を選択するか、经济管理機構に最適な構造を付与するか、といった問題が発生するが、この種の問題の技術的・組織構造的側面に関するかぎりでは、歴史的・因果的法則とは区別される合理的行動原理や最適性原理が作用する³⁰⁾。したがって、その解明には、ソ連における経済の最適計画化の展開が示しているように、規範的・目的論的視角と数学やサイバネティクスやシステム論などの量的・形式的分析方法が必要とされるのである。このように、構成的接近方法は歴史的・因果的法則の作用メカニズムの分析にとって有効性をもっている。この意味でそれは歴史的接近方法による分析の具体化をもたらすのであって、クルクが指摘しているように、「構造的解明は因果的解明のいっそうの深化をなす」と

いえるし、⁽³¹⁾またブラウベルグとユードインが主張するように、「システム論的・構造的・方法論的發展は弁証法的方法論的潜在力の豊富化と具体化をうながす」ということができる。⁽³²⁾

生産関係の二つの断面および経済機能分析の二つの接近方法が上述のような関係にあるとするならば、社会主義経済の機能メカニズムの分析においてつぎのような方法をとることが可能であり、必要でもあるということになる。それは、社会主義経済に固有な歴史的规定性を捨象した、経済機能メカニズムの一般的・技術的な組織構造の目的論的な量的・形式的分析と、社会主義的所有関係によって規定される、このメカニズムの社会経済的性格の因果論的な質的・内容的分析という二つの接近方法、すなわち、構成的接近方法と歴史の接近方法とをひとまず区別したうえで結合するという方法である。

前出の『グーゲルマンへの手紙』についても、それが示唆しているように、価値法則の解明は、生産手段の私的所有ないしは生産者の労働の私的人格によって規定される歴史的形態を捨象した「自然法則」、すなわち、社会的労働の比例的配分法則という抽象の段階を予定しており、この法則によって支配される労働配分的一般的・技術的な組織構造の分析について語ることが可能である。⁽³³⁾ 実際、マルクスはこうした一般的・技術的次元の分析をおこなっている。たとえば、『資本論』第一巻第五章における、資本主義的所有関係によって規定される価値増殖過程という歴史的形態を捨象した労働過程一般の解明や、第一章における大規模な協業の指導・監督機能一般の考察などは、労働過程やその編成様式の資本主義的形態が捨象された抽象の段階における分析をなしている。マイミナスが指摘しているように、「マルクスによる社会的生産の分析のもつとも一般的な経済学的諸前提は、その具体的・歴史的形態がまだ考察されないような抽象の段階を予定している。」⁽³⁴⁾ といつてよい。この

ように、社会主義経済の機能メカニズムの解明にあたっては、社会主義的所有関係によって規定されるこのメカニズムの社会経済的性格の因果論的な質的・内容的分析は、このメカニズムの技術的組織構造の目的論的な量的・形式的分析を予定しているのであって、両者はさしあたり区別されたいえで結合されねばならない。

以上で明らかのように、生産関係体系の二つの断面の区別と統一は両者の解明における接近視角や分析方法の区別と統一の必要を基礎づけている。そのばあい、クリコフが強調しているように、「生産関係体系の各側面を他の側面から抽象して研究することが必要であるが、同時にそれは、これらの側面をたがいに切りはなして孤立して解明しようとする危険性をはらんでいる」ことに注意せねばならない。⁽³⁵⁾ 規範的・目的論的視角や量的・形式的分析方法の必要の軽視は、社会主義経済の機能メカニズムの量的規定性やその計画化・管理機構の厳密な科学的基礎づけを不可能にし、マルクス主義経済学が現実の社会主義経済の計画化・管理において有効な武器となることを妨げる。従来のも連の経済学があまりにも記述的な性格をおびていたという前出のフェドレンコの問題提起は、このことに関する批判にはかならなかった。他方、歴史的・因果論的視角に立った質的・内容的分析の主導的役割の軽視は、社会主義経済の機能メカニズムの超歴史的・技術主義的な主観主義的「設計」に導きうる。それはマルクス主義経済学の基本的視角の放棄を意味するし、経済機能メカニズムの一般的・技術的基礎を抽象的に明らかにできるかもしれないが、その具体的な社会主義的形態を明らかにすることはできない。一般にいわれる近代経済学にはこのような超歴史的な「純粹」経済理論が特徴的であるが、こうした主観主義的「設計」の現代における代表格をなすが体制収斂説であるといえよう。

(23) マルクス『資本論』、青木文庫版、第一巻、第一分冊、二三五頁。

- (24) 前掲書、第三卷、第六分冊、一一六五頁。
- (25) 前掲書、第二卷、第一分冊、五二頁。
- (26) В. М. Агеев. Методологические и теоретические проблемы основного экономического закона социализма, Изд-во МГУ, 1973 г., стр. 29-30
- (27) Товарно-денежные отношения в системе планомерно-организованного социалистического производства, под ред. Н. А. Царгова, Изд-во МГУ, 1971 г., стр. 102-103.
- ポーランドのブルスモ『社会主義経済の機能モデル』(鶴岡訳、合同出版、一〇一—一三頁)のなかで、「基本的生産関係」と「経済機能メカニズム」との同様の区別をおこなっている。
- (28) 『マルクス・エンゲルス選集』、大月書店版、第八冊、一九〇—一九二頁。
- (29) 周知のように、ブハーリンは一九二〇年代に、社会主義のもとでは商品生産・価値法則は消滅し、それに代って一般組織学のない社会工学的な社会的労働の比例的配分法則が生産の規制者として登場するとして、盲目的に貫徹する客観的な経済法則が作用をやめるのであるから、経済学は消滅すると主張した。彼の経済学消滅論の根底には、経済法則の客観的性格の問題と、自然発生性・盲目性あるいは意識性・計画性というその作用様式の問題とを混同して、客観的経済法則の存在を盲目的な市場法則という作用様式にのみ結びつけ、計画的な経済の規制といういま一つの法則の作用様式があることを正しくみない考え方があった。しかし、社会的労働の比例的配分法則そのものについていえば、彼の誤りはこの法則をとりあげたことにあるというよりは、この法則のとりあげ方、すなわち、この「自然法則」が社会主義のもとにおいては歴史的な社会経済的規定性をおびた経済法則としてではなく、いわばただかて作用すると考えたところにあったというべきであろう。均衡の法則を見出すことが経済学の根本問題であると考える方が、彼のこの誤りの基礎にあった。
- (30) ランゲが指摘しているように(『政治経済学』、竹浪訳、合同出版、二〇六頁)、「経済活動が合理的活動であるところでは、プラクシオロシーの行動原理は経済法則の体系にはいる」といってよいであろう。
- (31) Д. М. Крук. Управление общественным производством при социализме, Изд-во «Экономика», 1972 г., стр. 27.
- (32) И. В. Бляуберг, Э. Г. Юдин. Становление и сущность системного подхода, Изд-во «Наука», 1973 г., стр. 99.

(33) マルクスは『クーゲルマンへの手紙』のなかで、さきに引用した部分に続けて、「科学の仕事は、まさに、この価値法則がどのようなようにして自己を貫徹するかを展開することにある。」と書いている（『マルクス・エンゲルス選集』第八冊、一九一頁）。社会的労働の比例的配分の「自然法則」の解明はこのような科学の構成部分をなすといえよう。

(34) E. З. Майминас. Процесс планирования в экономике: информационный аспект, Изд-во «Экономика», 1971 г., стр. 49.

(35) Товарно-денежные отношения..., стр. 103.

四 社会主義経済の最適機能システム論的分析の基本的方向

以上のような立場に立つて社会主義経済の機能メカニズムに接近し、社会主義に固有な歴史的形態を大なり小なり捨象するとき、それはもともと抽象的な形においては、『クーゲルマンへの手紙』にいうような社会的労働ないしは資源の比例的配分のメカニズム一般として把握できる。このような視角からみると、社会主義経済の機能メカニズムは、一つの総体として社会の欲望の充足を目的とし、この目的をもっともよく実現してゆくことができるように社会的労働を計画的に配分し組織するようなシステムをなしている。すなわち、社会主義経済の機能メカニズムは、一方に充足すべき社会主義社会の欲望、つまり政策目的ないしは計画課題の形で社会から与えられる目的をもち、他方に利用可能な社会的労働ないしは資源、つまり労働力および生産手段と技術とからなる目的達成手段をもっていて、この目的をもっともよく達成するように目的達成手段の合理的な利用の方法と機構を決定し、指令と経済的刺激による誘導との結合によってこの機構の各構成要素にたいする目的と手段の計画

的配分を組織してゆくような、目的志向的に機能する自己発展的なシステムにほかならない。

このようなシステムが、物質的過程とその制御過程とからなる複雑な構造をもったサイバネティクス・システムをなすことは前述のとおりであり、それは複雑なサイバネティクス・システムに共通すると考えられる特質、すなわち、全体性、多段階的階層構造、動態性、フィードバック(逆連関)、ホメオスタシス(恒常作用)、自己組織性、自己発展性などをそなえている。そのばあい、シュエーホフが指摘しているように、複雑なサイバネティクス・システムとしての経済機能メカニズムが全体性をたもって自己発展をとげるうえで、決定的な「システム形成的」役割をはたすのは、「システムの発展方向を決定しその全体性を形成する合目的メカニズム」であり、「発展の目的志向性こそが有機的な自己発展的システムを単なる諸要素の総計から区別する」のである。⁽³⁶⁾

したがって、複雑なサイバネティクス・システムとしての社会主義経済の機能メカニズムの重要な特質は、一定の手段で目的を最大限達成するような、あるいは所与の目的を最小限の手段で達成するような仕方、つまりいわゆる最小支出・最大効果の原則にもとづいて、資源ないしは社会的労働が配分されるよう機能するという最適性の原理が作用する点に求めることができる。そのためには、このシステムの目的達成手段である資源ないしは社会的労働の支出と、この支出の結果としてえられる社会の欲望の充足の度合いとの対比が、何らかの形でおこなわれなければならない。この意味で、コプリンスキーが述べているように、経済システムの固有の特徴は、その「機能と発展の現物的および価値的局面の有機的結合」にあるし、「システムの機能過程における支出と結果の較量……は経済システムの存在の不可欠の条件」であり、「客観的で効果的な較量のメカニズムなくしては生産と消費の経済的本質は消滅してしまい、それらの技術と工学的方法だけが残る。」⁽³⁷⁾ということが出来る。

このような支出と結果の対比、およびそれにもとづく資源ないしは社会的労働の配分の最適な方法と機構の決定および組織は、社会主義経済の機能メカニズムの多段階的階層構造のあらゆる次元でおこなわれる。この過程を社会主義経済の機能メカニズム全体について総括的・一般的に把握するとき、このシステムのいわゆる外部構造、すなわち、システムの出力をなす欲望充足手段の生産と入力をなす資源ないしは社会的労働の支出との関係は、最小支出・最大効果の原則にもとづいて決定されることになる。したがって、社会主義経済の機能メカニズムの最適化問題は、もつとも抽象的・一般的な分析次元においては、このシステムの内部構造に深く立ち入ることなく、これをブラック・ボックスとして扱ってその外部構造を選択する問題として把握することが可能である。

以上のような社会主義経済の機能メカニズムの規範的・目的論的な形式的把握は、このシステムの目的の達成度の表現としての最適性基準Ⅱ目的関数と、目的達成手段に関する制約条件とからなる極値問題の形をとる数学モデルに定式化することができる。社会主義経済の機能メカニズムの最適性基準としてどのような指標をとるべきかについては、ソ連においても種々の見解がある。ここでは詳論できないが、これらの見解を大別するならば、国民所得や社会的消費フォンドといった集計的な価値的指標をとる説と、社会的効用概念にもとづく社会厚生関数をとる説とにわけられる。⁽³⁸⁾ いずれにせよ、社会主義経済システムの最適性基準が、社会主義のいわゆる基本的経済法則によって規定される社会主義に固有な経済的目的、すなわち、「物質的にみちたりて日々にますますゆたかになってゆくばかりか、さらに社会全員の肉体的および精神的素質の完全に自由な発展と発揮とを保障する⁽³⁹⁾」という目的を、反映するものでなければならぬことは明らかであろう。このように、社会主義経済の機能

メカニズムのシステム論的分析は、ごく抽象的・一般的なモデルであっても、このメカニズムの社会経済的性格の質的・内容的分析とやはり統一されているべきものである。このような一般的なモデルをアガンベギャンらによりつつ定式化すれば、以下のように記述できる。⁽⁴⁰⁾

いま、社会主義経済の機能メカニズムの出力の状態、たとえば社会の最終生産物の構造をベクトル x であらわす。ただし、 $x \in IV$ である。このシステムの出力の可能な状態の集合を R とする。すなわち、 $x \in M \cap R$ である。このシステムの最適性基準である社会主義社会の欲望の充足度の何らかの指標は、ベクトル x の関数 $u(x)$ であらわされる。この目的関数は集合 R 上に定義される。ただし、 $u(x)$ が大であるほど目的達成度は高いものとする。

システムの入力、すなわち資源ないしは社会的労働の支出はベクトル y の関数 $v(y)$ であらわされ、この資源支出関数は集合 R 上に定義される。資源支出可能量をベクトル C であらわすとき、システムの制約条件は $v(y) \in \Delta \cap C$ で与えられる。この制約条件のもとでの許容解の集合、すなわち生産許容領域は集合 R の部分集合 $R_1(C)$ であらわされる。すなわち、

$$R_1(C) = R \cap \{x \mid v(x) \in C\}$$

したがって、最適解は生産許容領域 $R_1(C)$ 上で目的関数

$$q(x) \rightarrow \max$$

となるような x を定めるときにえられる。

上記のモデルでは、社会主義経済の機能メカニズムの基本的目的から出発して、すなわち、このシステムの上位システムをなす社会主義社会の経済的目的という外生的パラメータから出発して、目的関数が設定されている。

他方、制約条件は入力 \parallel 資源支出に関して設定されている。これにたいして、経済機能メカニズムがその上位システムとしての社会にたいしてもつ相対的自立性に注目するとき、その内部構造の最適化というこのシステムの内在的な目的を直接反映するような指標から出発することが可能である。⁽⁴¹⁾ システムの入力、すなわち、資源ないしは社会的労働の支出の最小化というパラメータが、そのような指標としてもつとも総括的・一般的なものと考えられる。そこで、資源支出関数 $\phi(x)$ を目的関数にとることとする。このシステムがみたすべき社会主義社会の欲望の必要充足水準を Q であらわすとき、制約条件は $\phi(x) \leq Q$ で示される。この制約条件のもとでの許容解の集合は集合 R の部分集合 $R_1(Q)$ であらわされる。すなわち、

$$R_1(Q) = R \cap \{x \mid \phi(x) \leq Q\}$$

したがって、最適解は許容解の集合 $R_1(Q)$ 上で目的関数

$$c(x) \rightarrow \min$$

となるよう x を定めるときにえられる。

上記の相互に関連する二つのモデルは社会主義経済の機能メカニズムの外部構造のモデルであり、このシステムのもっとも抽象的・一般的なモデルであるが、(一)システムの基本的目的が社会主義社会の欲望のできるだけ完全な充足にあること、(二)最小支出・最大効果の原則にもとづく資源ないしは社会的労働の配分の最適化という原理が作用することを、厳密な量的規定性をおびた形で明確に示している。これらの目的や原理はこのシステムの内部構造の構成要素の全体に貫徹している。したがって、上記のモデルは、社会主義経済システムの外部構造を明らかにすることによってこのシステムを総括的に把握し、システムの内部構造の分析の出発点を与えるよ

うなモデルであるといえよう。

この点に関連して、カツェニンポイゲンとシャターリンは、「最適経済発展論」が、「最適性基準の存在」と「所与の各時点における物質・労働・自然資源および科学技術知識の制約性」という、「二つの本質的前提から出発する」ことを指摘したうえで、「これらの前提は、生産諸関係のあれこれの型を特徴づける経済学的諸範疇の全総体を、システム論的に内的整合性をもって導き出すための必要十分条件をつくりだす。」と主張している⁽⁴²⁾。最適性基準と制約条件が、社会主義経済の機能メカニズムのシステム論的分析の二つの本質的前提をなすことはたしかであるが、それらが社会主義的生産関係体系の解明のための必要十分条件をつくりだすかのごとき主張は、すでにみたシャターリンらに特徴的な非歴史的で技術主義的な傾向の表現にはかならない。最適性基準と制約条件とからなる上記のモデルは、そのような役割をはたすには二重の意味で抽象的にすぎる。

すなわち、第一に、社会主義経済の機能メカニズムは前述のように複雑なサイバネティクス・システムであるが、上記の型のモデルは主として資源配分方法に関してこのシステムの基本的構造を示しえても、その管理組織の機構ないしは経済決定過程の最適化の問題を明示的に表現しうるものではない。ノヴォジロフは、「最適計画化理論は現在までのところ主として数計画法のみに注意を集中してきたため、初発的計画代替案の構成がそこで決定される当の経済的諸関係の改善の問題は日陰にとりのこされたままであった。」と指摘しているが、上記の型のモデルのこの点での抽象性は明白である。第二に、上記のモデルは、それを構成する最適性基準や制約条件の社会経済的内容については、資本主義にあてはまるようにも、社会主義にあてはまるようにも解釈することが可能である。このモデルにふくまれている社会の欲望の最大限の充足という概念や目的関数の概念は、ヴォ

ルコンスキーがいうように、「社会的価値体系と直接結びついている」のであって、「ここから、最適計画化は生産の計画化だけでなく生産関係の計画的指導をもふくむべきであるということになる」⁽⁴⁴⁾。しかし、この点で上記のモデルはきわめて一般的・形式的なモデルにすぎない。したがって、社会主義経済システムの内部構造の立入った分析のためには、以上の二点に関してモデルが十分に具体化される必要がある。

社会主義経済の機能メカニズムの内部構造を右の二点に関して具体的に説明してゆくことが、第一節でみたソ連社会主義経済の現発展段階の客観的条件が要求するような最適経済機能システムの創出には不可欠であるが、そのモデルは歴史的規定性をおびたこのシステムの複雑な構造と動態とを反映できるように、総合的なモデル体系として構成されねばならない。ここでは詳論できないが、複雑な構造をもつこのシステムのモデルの構成については、たとえばフェドレンコらが提唱するような三段階モデル体系によって、その多段階的階層構造とこれらの段階の間の相互作用を、単一の理論的接近方法の枠内で基本的な点で反映することができるように思われる。

(一)国民経済の総括的・集計的最適計画化モデル体系および資源と生産物の経済的評価体系、(二)国民経済次元の巨大プロジェクト、部門や大経済地域の最適計画化モデル体系およびそれらに対応する資源と生産物の局所的評価体系、(三)企業の最適計画化モデル、からなる三段階体系がそれである⁽⁴⁵⁾。このような体系は、社会主義的な民主主義的中央集権原則にもとづいて、社会全体の利益と、部門・地域・企業など経済機能メカニズムの各段階の局所的利益との統一の原則が保障されるように、国民経済全体の次元での最適性基準と局所的最適性基準との間の整合性がたもたれるよう構成されねばならないであろう。

社会主義経済の機能メカニズムの動態については、科学技術、人口、労働力、消費需要、その他に関する長期

予測モデル、目的樹枝法などによる社会発展の戦略的目的設定モデル、種々の長期プロジェクトなどと、国民経済計画モデルとの結合をはかるとともに、国民経済計画そのものについても、長期・中期・短期のその結合を保障するなどの必要があろう。⁽⁴⁶⁾

このような総合的なモデル体系の構成は、種々の数学的方法およびサイバネティクスないしはシステム論の方法の利用を必要とするが、すでに述べたように、これらの方法による社会主義経済の機能メカニズムの量的・形式的分析は、経済学の方法による質的・内容的分析の具体化と深化とに導く。したがって、数学的方法やシステム論の方法は経済機能の量的・形式的側面の単なる記述手段をなすにとどまらない。それらは、前記の社会主義経済の機能メカニズムの一般的モデルがそうであるように、経済学的分析に新しい視角や厳密な結論をもたらすことをつうじて、経済理論の深化と発展をうながすという重要な役割をはたすのである。

しかしながら、数学的方法やシステム論の方法は経済学の論理や経済学の質的分析方法にとつてかわることはできない。クルクが指摘しているように、「サイバネティクスは複雑なシステムの内的性格を捨象して、その課題をシステムの外的諸機能や環境における行動の研究に限定する」のであって、「社会的生産における社会的諸過程の質的側面を考慮する能力はない」⁽⁴⁷⁾し、その「社会的生産の管理における役割は、これらの過程の組織の技術的側面に限定されている」⁽⁴⁷⁾。数学的方法についても基本的に同じことがいえる。これらの方法は対象の物質的実体や内的性格、あるいは歴史的・質的規定性ではなく、形式的・外的構造や量的規定性の分析方法であって、社会主義経済の機能メカニズムの分析においても、経済学的な質的解明をぬきにしては内容的意味をもちえない。経済機能メカニズムの分析においてはこのシステムの経済学的な質的分析が主導性をもつし、数学的方法やシス

テム論的方法はそれと結びついていなければならない。

両者の間のこうした結合関係が保障されるためには、プラグチーフが指摘するように、「経済の極度の数学形式化への志向、ありとあらゆるものを数学装置と計算機によってとらえようとして、その可能性の限界を考えよう」としないようなところ⁽⁴⁸⁾は無益である。社会主義経済システムの総合的なモデル体系の構成においては、その具体的な構造と機能を反映しうるような形で、またそのようなばあいには、数学やシステム論の方法が利用されるべきであって、分析対象をありあわせの数学やシステム論の方法の形式的な枠のなかにおしこめるべきではない。だが、このことには一つの積極的な含意がある。フェドレンコが力説しているように、このことは「単にサイバネティクスや数学のあれこれの方法の経済への適用に制約を課すにとどまらず、原則的に新しい、より完成された精巧なサイバネティクスの概念や数学的道具を仕上げてゆくことを要求する」⁽⁴⁹⁾のである。最適経済機能システム論がそのような成果にまで導くかどうかは今後の展開に待つべきであろう。

(29) Н. С. Шухова. Методологические аспекты системного подхода в политической экономии. «Вестник МГУ. Экономика», № 5, 1972 г., стр. 5.

(37) Н. Е. Корбинский. Основы экономической кибернетики. Изд-во «Экономика», 1969 г., стр. 36.

(38) これらの説のいずれをとるにせよ、実際上の問題としては、社会主義社会の経済的目的、すなわち、「この社会の欲望の充足度の指標として何らかの単純化された指標を採用することが必要である。この点に関連して、グランベルグは社会厚生関数説の立場に立ちつつも、「この関数の存在およびこの関数のもつとも重要な特性の見地から、種々の単純化された国民経済の最適化の基準を評価し、それらより完成された修正物を仕上げてゆく必要がある」として(Проблема народнохозяйственного оптимума, под ред. А. Г. Аганбегяна и К. К. Вальгуха, Изд-во «Экономика», 1969 г., стр. 46.)、所与の品目構成の消費の最大化、社会的労働支出の最小化、その他の実用的基準を提案

している。彼の見解については、拙訳のフ・タ・グランベルト『社会厚生目的関数と実用国民経済モデルにおける最適性基準』上・下(『立命館経済学』第二十二卷第二号、第二十二卷第一号)を参照されたい。

- (39) エンゲルス『反デュロント論』国民文庫版、第二冊、四八九頁。
- (40) A. Г. Аганбегян и др. Система моделей..., стр. 101—113.
- (41) 社会主義経済システムの外的目的と内的目的の区別、およびこの二側面からの社会の低位システムとしての経済システムの把握の必要については、ハイチナスが詳細に論じている(E. 3. Майнас. Процессы планирования..., стр. 62-77.)。
- (42) A. Каценегинбойген, С. Шаталин. Вопросы применения математики в экономической теории, 《Вопросы экономики》, № 4, 1967 г., стр. 99.
- (43) В. Новожилов. О проблеме развития теории оптимального планирования на современном этапе, 《Вопросы экономики》, №10, 1970 г., стр. 53.
- (44) В. А. Волконский, Принципы оптимального планирования, Изд-во 《Экономика》, 1973 г., стр. 16.
- (45) Н. П. Федоренко. О разработке системы..., стр. 202. この体系をよくすれば経済的評価体系については、線型計画の双対問題の解としてえられる双対評価や非線型計画のはじめのマトリックス乗数の問題があるが、ここでは立入ることはできない。
- (46) A. Г. Аганбегян и др. Система моделей..., стр. 31-32; Н. Федоренко. 《Вопросы экономики》, №6, 1972 г., стр. 98.
- (47) Д. М. Крук. Управление общественным производством..., стр. 20-21.
- (48) В. Ф. Плутчев. Оптимизация планирования, Изд-во 《Экономика》, 1968 г., стр. 12.
- (49) Н. П. Федоренко. О разработке системы..., стр. 23.